

コルシカ語における音声アクセントと符号アクセントについて

L'incalculu ed u so' grafismu di a lingua corsa

長谷川秀樹

Hideki Hasegawa

はじめに

アクセントには音声アクセントと符号アクセントがあり、音声アクセントは強弱（ストレス）アクセントと高低（ピッチ）アクセント、さらには長短アクセントに分類される。日本語や北欧諸語はピッチアクセントが、英語はストレスアクセントが、事例は多くないがエストニア語などは長短アクセントが特徴として見られる。また複数の種類のアクセントが複合した言語もあれば、まったくアクセントを持たない言語もある。

ロマンス語のアクセントは軒並みストレスである。ただし、単語のどの音節にアクセントがあるかという位置、特にその位置が常に同じ音節の位置にあるか、単語によって異なるかという点では、固定的なフランス語と流動的な他のロマンス語に大別できよう。

本稿で取り上げるコルシカ語もまた、流動的音声アクセントを有する。ただ、他のロマンス語にはあまり見られない特徴もあり、符号アクセントもあわせて本稿でその特徴と機能に関して言及したい。

1. 音声アクセント (*l'incalculu, l'accent tonique*)

1) アクセントの種類

コルシカ語のアクセントは強勢アクセントのみであり、母音の長母音化や半長母音化の現象、ピッチは確認されない。今日ではアクセント音節を示すために IPA では強勢アクセント符号 (ˈ) をアクセントがある音節の母音の前に付すことになっている。

2) アクセントの機能

コルシカ語はロマンス語の中でもアクセント、特にそのアクセントが単語のどの音節にあるかという位置が重要である。同一の音素から構成される単語であっても、アクセントがどの位置になるかによって意味が変わるからである。たとえば [madʒina] という音素を

もつ単語について言えば、アクセントの位置で次のように意味が異なる (DALBERA-STEFANAGGI[2002:21])。

- 一番前の音節にアクセント [m'adzina] (挽き臼)
- 真ん中の音節にアクセント [madz'ina] ([[彼、彼女は] 挽く)
- 最後の音節にアクセント [madzin'a] (挽く [不定法])

上の例からコルシカ語のアクセントには示唆的機能が見られ (*ibid*)、特に同音節辞列の区別、対象の働きを有することがわかる。

3) アクセントの位置 (動詞を除く)

音声アクセントが流動的なロマンス語 (フランス語は除く) では、後ろから二番目の音節 (パロクシトン *paroxyton*) にアクセントがくることが多い。コルシカ語もこの傾向が見られるが、後にも触れるようにコルシカ語は動詞不定法のアクセントは大部分が最終音節 (オクシトン *oxyton*) にあることからイタリア語やスペイン語に比べればその比率は小さいと考察される。コルシカ語のアクセントの特徴は動詞にあると見てよいだろう。よって、ここではまず、動詞以外のアクセントの位置について言及する。

①最終音節 (オクシトン) にアクセントがある単語

cità[tʃid'a] (都市) 伊語 *città* 仏語 *cité* 西語 *ciudad*

perchè [perk'e] (なぜ) * 伊語 *perché* 仏語 *pourquoi* 西語 *porque*

libertà [li'ert'a] (自由) * 伊語 *libertà* 仏語 *liberté* 西語 *libertad*

calamità [karamid'a] (災禍) 伊語 *calamità* 仏語 *calamité* 西語 *calamidad*

*いずれも北中部の音声。南部は [park'i]、[libart'a] となるが、アクセントの位置は同じ。

なお、最終音節にアクセントを持つ単語は、コルシカ語では「エ・パローツレ・モツツェ (*e parole mozze*=切断語)」と総称される (AQUAVIVA *et alii*[1994:70,83])。

②最終音節の直前の音節にアクセントがある単語

パロクシトンにアクセントを持つ語の比率はコルシカ語でも高いと考えられる。具体的

な数値はないものの、このケースに該当する単語は総称して「エ・パローツレ・リッシェ (e parole lisce)」、すなわち「滑らかな、流れるような」語と呼ばれる (*ibid.*) ことから推察される。

cane [k'ane] (犬) * 伊語 cane 仏語 chien 西語 perro
simana [sim'ana] (週) 伊語 settimana 仏語 semaine 西語 semana
caramusa [karam'uza] (バグパイプ) 伊語 cornamusa 仏語 cornemuse 西語 gaita
pulitichella [pulidig'ela] (汚職政治) 伊語 pulitichella 仏語 — 西語 politiqueria

*一部地域では ghjacaru [dj'agaru]となる。

しかしながらパロクシトンがアクセントを有する比率はイタリア語やスペイン語ほどは大きくないと考えられる。それはコルシカ語の動詞アクセントおよび呼格 (*vocativu, vocatif*) の存在によるが、これらについては後述する。

③後から三番目の音節 (プロパロクシトン *proparoxyton*) にアクセントがある単語

プロパロクシトンにアクセントを持つ語は、原則としてイタリア語の類似同義語と同じ位置にアクセントを有する。結果としてフランス語の類似同義語とはアクセントの位置が異なる。また、下記の語尾を有する単語はプロパロクシトンにアクセントを有する。

i) 特定の音声を語尾に有する一部の形容詞

[-igu] (形容詞の男性単数形語尾) 仏伊語については、ゴシックイタリック部分にアクセント
classicu [kl'as̄igu] (古典の) イタリア語 *classico* フランス語 *classique*
ecconomicu [egun'omigu] (経済的な) イタリア語 *economico* フランス語 *économique*
classica [kl'as̄iga], classichi [kl'as̄igi], classiche [kl'as̄ige] など性・数にかかわらずアクセントの位置は変わらない。

[-imu] cf. *ultimu* ['ultimu] (最終的な) [-ulu] cf. *picculu* [p'ikulu] (小さい) なども同様

ii) 特定の音声を語尾に有する一部の名詞

[-ogu] [-ovu] (「～学者」などの職名を意味する名詞)

suciologu [sudʒ'olugu] (社会学者) イタリア語 *sociologo* フランス語 *sociologue*
 filosofu [fil'ozovu] (哲学者)、イタリア語 *filosofo* フランス語 *philosophe*
 [-ulu]
 populu [p'obulu] (人民) イタリア語 *popolo* フランス語 *peuple* (パロクシトン)
 [-unu]
 telefunu [tel'svunu] (電話) イタリア語 *telefono* フランス語 *téléphone* (同))

プロパロクシトンにアクセントを有する単語は、コルシカ語では「エ・パローツレ・ズグ
 イッルレ (e parolle sguillule)」と総称する (*ibid.*)。「滑り落ちる語」の意味である。

④後から4番目の音節にアクセントがある単語

動詞命令形+二つの目的語、もしくは代名動詞命令形+一つの目的語からなる複合語では、後から4番目の音節にアクセントがくる場合がある。動詞部分が二音節で構成される場合である。下記の事例を参照。

Manghjatilu [m'ãdjadilu]* (彼を気にかけてよ)

*manghjati (心配する、気を揉む manghjassi) の命令形 (二人称単数形・代名動詞)

lu 男性単数形の間接目的語

Manghjemucilu [mãdj'ãmudzilu]* (彼のことを気にかけてよう)

*manghjemuci manghjassi の命令形 (一人称複数形・代名動詞)

Detimini [d'ãtimini]* (それを私にください) (DALBERA-STEFANAGGI[1978:33])

*deti (与える dà) の命令形 (二人称複数形) mi (私に) ni 中性代名詞 (それを)

Mandetiuli [m'ãd'ãtiuli]* (それを彼らに送ってください) (*ibid.*)

*mandeti (送る mandà) の命令形 (二人称複数形) u 男性単数形の直接目的語

li 男性複数形の間接目的語

4) 動詞 (不定法) のアクセント位置

名詞や形容詞など動詞以外の単語のアクセントの位置については、コルシカ語はイタリア語とほぼ類似しているといえる。だが、動詞については特にコルシカ語動詞 (特に不定法) は同形同義のイタリア語動詞よりも通例一音節少ないことから、アクセントの位置が異なるケースが見られる。

①-a および-i 動詞の不定法におけるアクセント

コルシカ語動詞不定法はすべて-à, -i, -e で終わり、それぞれに規則変化動詞と不規則変化動詞がある。たとえば、cantà (歌う)、 manghjà (食べる)、 parlà (話す) は-à 規則変化動詞でコルシカ語動詞の圧倒的多数を占める。dà (与える) や avà (持つ) は-à 不規則変化動詞である。-i 動詞については、di (言う) が不規則変化、fini (終わる) や ferì (危害を加える)、stupì (驚かせる) が規則変化となる。¹⁾ 以上の動詞不定法はすべてオクシトンにアクセントがあり、²⁾ アクセント符号が付されている。

②-e 動詞の不定法におけるアクセント

-e 動詞はそれほど多くない。不規則変化動詞としては esse (～である) や smove (動かす、感動させる) や vede (見る)、規則変化動詞には teme (不満を言う)、tene (取る) があるが、いずれのケースもアクセントはパロクシトンに位置する。ただし、例外があり不規則変化動詞の pudè (～できる) と vulè (～したい)、duvè (～しなければならない) という助動詞的役割をもつ動詞についてはオクシトンにアクセントがある。

5) 単音節語のアクセントについて

単音節語のアクセントについては、符号と音声アクセントとが必ずしも一致しない点が見られる。たとえば表記の点では定冠詞女性複数形 e と è (～そして) は異なるが、双方ともアクセントを持たない単語であり、³⁾ 接続詞の e にアクセント符号を付すのは、定冠詞の e と連続して使用した場合の混同を回避するためにすぎない。同様に前置詞の à (～に)、pè (～のために) * cù (～とともに、～を用いて) * も同じ理由から音声アクセントはないがアクセント符号が付されている。コルシカ語の主な単音節語を音声アクセントの有無に分類すると次のようになる。

*次に母音で始まる単語が続いた場合はそれぞれ per, cun となる。cf. per un paese (村のために) また cù は一部地域では incù もしくは incunu となる。

①音声アクセントがない場合

- (i) 定冠詞の u, a, i, e (男性単数、女性単数、男性複数、女性複数)
- (ii) 代名詞 (直接目的語) の u, a, i, e, mi, ti, li, ci, vi (ただし強勢形は除く)
- (iii) 代名詞 (所有格) の me, to
- (iv) 指示形容詞 stu, sta, sti, ste (男性単数、女性単数、男性複数、女性複数)
- (v) 前置詞 à, pè, cù, in (～のなかに)、frà (～の間に)、di (～の)、da (～から)

(vi) 接続詞 è

(vii) その他 po (次に)、fa (～前に・昔に)、un (ある一つの) *、su (下に、立って)

*不定冠詞男性単数形。次に来る単語が子音で始まる場合は unu となる。

②音声アクセントがある場合

(i) 動詞 (活用形の如何にかかわらず)

不定法 dà (与える)、 di (言う) stà (ある) fà (する)

その他の活用形 hè、 esse (～である) の三人称単数現在形

sò 一人称単数現在形・三人称複数現在形

si 二人称単数現在形

mi、 mirà (見る) の二人称命令形

pò、 pudè (できる) の二人称単数現在形

hà、 avà (もつ) の三人称単数現在形

(ii) 名詞 rè (王)、 tè (茶)

(iii) 副詞 bè (よく)、 un (～ない)

(iv) 強勢形目的格人称代名詞 mè、 tè、 sè など

③呼格とアクセント

コルシカ語での呼格 (*u vocativu, le vocatif*) とは、親しい人に名前や職名を付けて呼びかける際に用いられる形態である。原則として「O + 名前もしくは職名の短縮形 (アクセントを含む音節から前の部分)」となる。その際、短縮形はアクセントのある単音節語となるケースが多い。下記の事例を参照されたい

【通常】 (アクセント音節より前の部分は 【呼格】

ゴシック・イタリックで表示)

Ghjacumu [dj'agumu]

(ジャック)

Mamma [m'āma]

(お母さん)

Santu [s'ātu]

(神父、聖人)

O Ghjà! [oj'a]⁴⁾

(やあ、ジャック)

O Màm! [om'a]

(ああ、おかあさん)

O Sàm! [oz'a]⁵⁾

(神父さんよ!)

ただし、Filippu (フィリップ) のようにパロクシトンにアクセントがある名称については、呼格では二音節語となる。

Filippu [fil'ip̄u] → O Fili [ovil'i]⁶⁾

6) 名詞に接尾辞がついたときのアクセントの移動と母音変化

名詞に接尾辞がつき派生的意味を有する単語が生じた場合、もとの名詞のアクセントが移動し、そのアクセントが他の音節に移動したことによって母音に音声変化が生じるケースがコルシカ語に見られる。-ismu (～主義) や指小辞 (le suffixe diminutif) の-ella などがその事例である。

Corsica [k'orsiga] (コルシカ島) → cursismu [kurs'ismu] (コルシカ主義)⁷⁾

Cursichella [kursig'eĭla] (愛しいコルシカ)⁸⁾

II. コルシカ語のアクセント符号について

1) 歴史的経緯 (FUSINA[1994],MARCHETTI[1989],PASQUALINI[1989])

次にコルシカ語書記法におけるアクセント符号を見てみよう。それにはまず簡単な歴史的経緯について触れることが必要である。なぜならば、コルシカ語の書記法は長い期間に及ぶ知識人との間の闘争の結果、妥協の産物として生まれたものだからである。コルシカ語の書記法をめぐる論争が始まるのは 19 世紀末期からであるが、政治思想とも絡んだ深刻な闘争は戦間期における二つの学派によるものであった。

一つの学派は南フランスで 20 世紀初頭から見られた「フェリブリージュ」に着想をえたグループで、「シルネア主義 (Cyméisme)」と呼ばれるポール・アリギとアントワヌ・ボニファシオを筆頭とする文学運動であった。このグループの中心的活動はコルシカ語での文学や詩歌の創作活動で、その成果を『コルシカ年報 (L'annu corsu)』にて公表する純粋な文学運動であった。

もう一つのグループは退役軍人や地元の聖職者、教師、芸術家などから構成される、週刊新聞『ア・ムーヴラ (A Muvura)』を刊行する学派であった。このグループはコルシカ語の学校教育権を要求すると同時に、コルシカ民族の政治的自治権を主張していた。民族性の保持のためには政治的権力が必要と考えたためであったが、非政治的活動を展開していた「シルネア主義」とは絶えず対立関係にあった。

こうした対立関係はそれぞれの学派が採用していた書記法にも反映されていた。「シルネア主義」が採択していたのはボニファシオ書記法というもので、フランス語に近い書記法を用いていた。一方、「ア・ムーヴラ」が採用していたのはカルロッティ書記法でイタリア語に近い書記法であった。⁹⁾

こうした対立は戦後しばらくも継続し、統一的な書記法が制定される機運が高まったのは、コルシカ語の衰退がいよいよ深刻になり、学校での教育が可能となる 1951 年に制定されたディクソヌ法の対象となることを目指した 1960 年代後半期であった。こうした努力もあってコルシカ語の学校教育は 1983 年新学期から開始される。

2) 今日でも不確定なコルシカ語のアクセント符号

だが、いくつかの点でコルシカ語には書記法の未確定部分がある。アクセント符号もその一つで、標準イタリア語ではアクセント符号を付すのは、音声アクセントがオクシントンにある場合のみに確定しているが、コルシカ語は必ずしもそうではない。

コルシカ語では学校や教育教材に関しては、パロクシントンにアクセントがある場合を除き、すべてアクセント符号を表示している。これは社会言語学的要因と教育的配慮からとられた措置である。なぜならば、コルシカ語学習者のほとんどはコルシカ語が母語ではない若い人たち、すなわちフランス語を母語としフランス語を日常使用する生活環境の中で育っているため、フランス語のアクセントでコルシカ語の類似語を誤認する可能性が高いため、フランス語との違いを視覚からも学ばせる必要性があるからである。また、IPA を用いないコルシカ語辞書についてはアクセントの位置にかかわらず符号をすべて表記している。

まとめ

以上の論述をまとめるならば、コルシカ語の音声アクセントは動詞の一部を除けばイタリア語のアクセントに近似していると言えるであろう。しかし、特に単音節語のアクセント符号については両言語は意味が異なる場合がある（別表参照）ので留意が必要となる。また、コルシカ語の音声は鼻母音の存在などフランス語の影響も受けていることから、今後は音声アクセントにおけるフランス語からの影響についても考察を深めたい。

註

1) -i 不規則変化動詞不定法は地域によっては -isce となる。たとえば *fini* は *finisce*, *feri* は *ferisce*, *stupi* は *stupisce* となる。この場合はアクセントはパロクシントンに置かれる。また異なるのは不定法のみで他の形

態は同じである。

2) ただし、-i 規則変化動詞不定法でも代名動詞の場合は除く。コルシカ語代名動詞不定法はイタリア語同様「不定法+ si (あるいは ssi)」の複合語となる。chjamassi (名前は〜である。chjamà 呼ぶ、称する)、sciogliessi (着脱する。scioglie 外す) などであるが、いずれの場合もパロキシトンにアクセントが置かれる。

3) ただし、次のようなケースではèにアクセントが生ずる。Hai visitatu u Ghjappune? u Ghjappune è a China (日本に行ってきたの? いや、行ったのは日本と中国よ)

4) 5) 6) 無声子音の前に母音で終わる単語が来た場合、無声子音は有声化し (/s/→/z/)、一部の有声子音の前に母音で終わる単語が来た場合は逆に無声化する (/dj/→/j/)。この現象については二年前の本誌における拙稿を参照されたい (長谷川 [2003])。

7) コルシカ主義とは第一大戦終了直後からコルシカ島で起きた主に退役軍人や聖職者たちからなる自治主義運動を指す。『ア・ムーヴラ (A muvra)』というコルシカ語の週刊新聞を刊行していたため、「ムヴラ主義 (muvrismu)」とも呼ばれる。当時コルシカの回収を目論んでいたファシスト政権の財政援助を受けていたとされるが (PASQUALINI [1989:62-65])、詳細は不詳。

8) 詩的表現であるがよく用いられる。

9) たとえば前置詞/a/は、カルロツェイ書記法ではイタリア語の前置詞 a と同じ a にしていたのに対し、ボニファシオ書記法ではフランス語の前置詞 à と同じ à が用いられていた。今日のコルシカ語の前置詞/a/ はボニファシオ書記法を採用している (*A Muvra*, 21-28 aprile 1935)。

参考文献

ACQUAVIVA Marcellu et alii, 1994 *U Corsu bellu bellu, intornu à a cuminicazione*, CRDP-Corse
A Muvra

COMITI Jean-Marie 1996 *A Pratica è a grammatica*, Squadra di u Finusellu

DALBERA-STEFANAGGI Marie-José 1978 *Langue corse, une approche linguistique*, Klincksieck

_____, 1995 *Nouvel atlas linguistique et ethnographique de la Corse*, CNRS
Éditions

_____, 2001 *Essai de linguistique corse*, Alain Piazzola

_____, 2003 *La langue corse*, PUF

FUSINA Jacques 1994 *L'enseignement du Corse, Histoire développements perspectives*, Squadra di u Finusellu

_____, 1999 *Parlons corse*, l'Harmattan

長谷川秀樹 1999 「コルシカ地域・自治主義運動の展開と『コルシカ方言』の形成」西川長夫・渡辺公三編『世紀転換期の国際秩序と国民文化の形成』柏書房

_____、2003 「コルシカ語の音韻的特性について」『ロマンス語研究』36

MARCHETTI Pascal 1989 *La Corsophonie, un idiome à la mer*, Albatros

PASQUALINI Alain 1989 "L'organisation de l'action irrédentiste", *Etudes corses*, No.33, La marge

別表 単音節語におけるアクセント符号の有無 (一例)

	コルシカ語	イタリア語	フランス語
a	女性単数定冠詞、 女性単数目的補語	前置詞 (〜へ)	「持つ (avoir)」の 3人称単数現在形
à	前置詞 (〜へ)		前置詞 (〜へ)
da	「与える (dà)」の3 人称単数現在形 前置詞 (〜から)	前置詞 (〜から)	
dà	上の動詞の不定法	「与える (dare)」の3 人称単数現在形・2人 称命令形	
di	前置詞 (〜の)	前置詞 (〜の)	
dì	「言う (di)」の不 定法、2人称命令 形	日付など	
e	女性複数定冠詞 女性複数目的補語	接続詞 (〜と)	
è	接続詞 (〜と)	「〜である (essere)」 の3人称単数現在形	
fa	副詞 ([時間が今か ら]〜前に)	副詞 ([時間が今から] 〜前に)	
fà	動詞「する」の不 定法。および2人 称命令形	「する (fare)」の2 人称命令形	
me	1人称所有格代名 詞 (私の)	直接補語人称代名詞 1 人称強勢形 (私を、私 に)	直接補語人称代名詞 1 人称 (私を、私に)
mè	直接補語人称代名 詞 1人称 (私を、 私に)		
mi	再帰代名詞 1人称	meの非強勢形。 再帰代名詞 1人称	
mi	「見る (mirà)」の2 人称命令形。		
ne	数量を示す代名詞。 虚辞	di+名詞の代名詞	否定語 (〜ない)
nè	否定語		
né		否定語	「生まれる (naître)」 の過去分詞